
悪魔様！お守りいたします！

憊榎愁？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔様！お守りいたします！

【Nコード】

N2027Y

【作者名】

懣榎愁？

【あらすじ】

「しょうがないのう。悪魔である儂が願いをかなえてやろう。有難く思うが良いぞ」

「いや。神様にジョブチェンジで」

まあ、こんな話です。

1. 放課後。(前書き)

奇声獣という漫画を読み終えたばかりの、懣懣愁？です。ミギー最高です。てな訳で書いてみました。良ければ読んでください（・ω・）。

1. 放課後。

転んだ人を笑ってはいけない。彼は歩こうとしたのだ。一米倉誠一郎

朝起きて窓を見るとね、桜の木が見えんのよ。それが私のささやかな幸せ。一櫻井未来

「真雪、話聞ってる？」

「悪い、聞いてなかった」

「聞け！」

僕こと、波白真雪^{なみしろまゆき}の友人である櫻井未来^{さくらいみく}は、僕の顎の辺りを渾身の力を込めたであろう一撃で殴った。よって僕は激痛と共に、軽い脳震盪のような状態に陥る羽目となった。

この暴力女、と言おうとしたがそれは櫻井にとっては禁句、所謂タブーであるので僕は言葉を飲み込んだ。だからといって、言い返さない訳にも行くまい。

「いってえな！話を聞かなかっただけで、殴る奴がいるか！しかもピンポイントに顎を狙いやがって！お前はボクサーか！ボクサーなんだな！」

「ボクサーな訳ないでしょ。こんな可憐なボクサーがどこにいるってのよ」

「ときに櫻井、辞書はあるか？」

「何に使うってのよ」

「可憐の意味を調べなおそうと思ってな」

「はいよっ！好きなだけ調べなさいよ！」

「ごふっ！」

辞書を投げられた。顔面にジャストミートだ。先ほどよりも大きな衝撃と激痛が僕を襲った。ていうかお前、何処に辞書を持ってた。お前はあれか、ネコ型ロボットなのか。

まあいいや。それよりも、可憐可憐と。

「何本当に調べてんのよ……。いいから話進めるわよ。もうっ、あんたと話していると、全然話が進まないわ」

「そういえば、何の話をしていたんだっけか」

「はあ！？ あんた馬鹿なの！？ 数分前まで話してた事、普通忘れる！？ あんたその辞書で馬鹿って調べてみなさいよ。意味に波白真雪って書いてあるわよ」

多分、人生の中で一番馬鹿にされた。おそらく、心から馬鹿って言われた。何か傷つくな、意外と。馬鹿の意味。今調べるのは何か恥ずかしいから帰ってみたら調べてみよう。

「遠足よ、遠足！」

「堰塞？」

「違うわよ！ クラスの親睦を深める、交流遠足！」

「ああ、思いだしてきた」

そういえば、僕はクラス替えの結果二年三組となり、見事学級委員長に推薦され（半ば押し付けられた感じではあるが）副学級委員長である櫻井と遠足について話し合いをしている所だったのだ。

何でこんな大事な事を忘れていたのか、それを知る術は僕にはない。

「それで確か、班決めについて話してたんだよね」

「そうそう。やっと思い出した？ しっかりしてよね、この後おやつは何円までにするかとか、色々決める事があるんだから」

「いや、おやつは別にいいだろ……」

おやつの相場は三百円と決まってるもんだ。それにバナナは含まれないのだ。コレ蒔蓄。全然違うけど。

「とりあえず！ あんたは私と同じ班ね！ これ決定事項だから！」

「はあ！？ どうしてそうなんだよ！」

「あんたを監視するためよ。あんたを野放しにしたら、皆がハッピーな遠足を行えないでしょ。だから、あんたは私が監視します」
「なっ……」

酷い言われようだった。まるで僕に自由が無いかのようないい方じゃないかそれは。人権も糞もねえ。副委員長の間際で、委員長に逆らうとは良い度胸だ！

「僕が何をした！僕に人権はないのか！反対だ、断固反対だ！」

僕の無数の抗議を、櫻井はたった一つのため息で遮った。そのため息に、怒気が込められていた事は言うまでも無かった。

「一年春。更衣室監視カメラ事件」

「うっ」

「一年秋。体育祭の写真アルバム（女子）売買事件」

「あうっ」

「二年夏。水泳部の練習中写真流出事件」

「やっやめ」

「二年冬。女子生徒マフラー手袋紛失事件」

「す、すいませんでした！」

も、もう言わないでくれ！僕の醜態が、白日のもとに晒されている！赤裸々に語られている！放課後だから、教室には誰もいないけども！二人きりだけでも！すっげえ恥ずかしい！

「分かった？あんたには前科があんのよ前科が。こんだけの事しておいて、よく人権がどうか言えるわね。あんたもう、これ以上ないってくらい好き勝手やってるじゃない。私の父さんが理事長じゃなかったら、あんた軽く退学よ。さすがにこれ以上問題起こしたら父さんでも庇いきれないわよ」

確かにお前のお父さんには幼馴染みだからという理由で良くしてもらってる。これ以上の迷惑をかけるのは、いくらなんでも申し訳ない。ここは僕が、我慢すればいいだけの事。

櫻井のお父さん、マジで優しいからな。あの人なら、自分が辞職して僕の退学を阻止する、ぐらいの事はやりかねないからな。小学

校の頃とか、友達の前宿題を無償でやってあげたりしてたんだろうな
ー。あの人、頼み事は断れない人間だ。あの人みたいな良い人が借
金の連帯保証人になったりして、悲惨な人生を送る事になるんだろ
う。

やばい、本格的に心配になってきた。あの人大丈夫かな……。

「分かった、同じ班で良いよ。但し僕が班長だ！」

「別にいいわよ。名ばかり班長だけど」

「何だそのいい草は！」

「権力は班員以下です」

「僕に権力ねー！」

櫻井は意地でも僕に権力を持たせないつもりらしい。どうやら、
断固たる決意ができたらしい。まあ、こいつの意地っぱりな所とか、
一度言った事を撤回しない所は嫌いじゃないけどな。

それにしてもこいつ、何か楽しそうだな。

僕と櫻井の仲は、早い物でもう七年。小学生の頃からの仲なのだ。
少しの動作の違いや表情の違いで、機嫌の具合なら分かる。今の機
嫌は相当良い。ここ最近では一番だろう。

ってまあ、今回の場合は誰にでも分かるか。

櫻井が、こんなに笑ってるもんな。こいつが笑うなんて滅多にな
い事だ。よほど嬉しいか、あるいはよほど悲しい時にしか笑わない。
前者は喜びの笑顔。後者は我慢の笑顔。前者はとても眩しくて、
後者死ぬほど脆いのだ。どちらの笑顔も僕は知っている。できる事
なら、後者の笑顔は二度と見たくはないものだ。

女の子が楽しく笑っていれば、それだけでこっちも笑みがこぼれ
る。

「あ、真雪に聞きたい事があるんだった」

「うん？なんだ、碌でもない事は聞くなよ」

「別に、あんたじゃなくても良いんだけどね……。聞きたい事って
のは、神社の事についてよ」

「神社？」

神社って、お前確かキリスト教信者じゃなかったか？確か、月に何回か礼拝堂に行ってミサとかもやってるって言ってたような。

「それはそうなんだけどね。仏教に乗り換えるとかそういう訳じゃないのよ。ただ、噂があるでしょ」

「それって、小宮山神社こみややまじんじやの事か？」

小宮山神社。既に参宮者もいなくなって、廃れたしまった神社、信仰も無い神社である。

そんな神社に、今ある噂が流れている。

「そう。お願いすれば何でも願いが叶うって噂よ」

始まりは、街に住む未婚の女性。彼氏に振られ自棄になっていた女性は、小宮山神社に冗談半分で結婚したいと願った。すると次の日、アパートの隣の空き部屋に男性が入居。数日後に付き合い、数週間後には結婚を果たしたのだ。

その女性は小宮山神社にお願いしたら願いが叶いました、と自身のブログに掲載。そしてそれを見た人物が、遊び半分でお願いしに行ってみるとその人物も願いが叶った。

そうして次第にその神社の噂は広まり、今では他県からも人が訪れる名所になってしまったのだ。

「馬鹿馬鹿しい。って思うけどな」

「ふーん。意外な反応」

「そうか？」

「うん。あんただったら『世界中の女子を俺の物に！』とかお願いしそっだもん」

お前の中での僕のイメージってそんななのか。とんでもなく最低な奴じゃねえか。それに、僕の一人称は俺じゃない。一人称が僕。これは重要な事だ。お前の勝手なイメージを押し付けるな！って言いたいところだけど、そう思われても仕方ないことしてるからなー、僕。

「そういうお前はどうかんだよ。おまえにも叶えたい願いくらいあるんじゃないのか？キリスト教を信仰してるぐらいなんだし、神に

祈ったりするんじゃないのか？」

「うーん。あるっちゃあるんだけどね。願いなんて自分で叶えてなんぼでしょ？」

「……そうだな」

その通りだ。願いは自分で叶える物。しかし、人は神に縋る事を辞められない。神という格上の存在を信じる事で何でも叶うようなそんな気持ちになる。信仰は麻薬だ。一度知ってしまうと、辞める事は出来ないのだ。

「それに、私は父さんがキリスト教の熱烈な信者だからね。それに付き合ってるみたいな感じよ」

「ふーん」

そうなのか。それは、初耳だったな。長い付き合いだと言うのに、知らない事の一つや二つあるもんだな。まあ、櫻井にも僕について知らない事はあるんだろうけど。

「下らないこと聞いちゃったわね。早く進めましょ。もう一七時回ってるもの」

「おう！」

この後僕は、小宮山神社に行くのだけれどそんな事を知る由もなく、呑気に僕はこの緩やかな時を楽しんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2027y/>

悪魔様！お守りいたします！

2011年11月4日03時05分発行